

【359】

氏 名（本籍）	増 <sup>ます</sup> 田 <sup>だ</sup> 直 <sup>なお</sup> 子 <sup>こ</sup> （茨城県）		
学位の種類	博士（文学）		
学位記番号	博 乙 第 2174 号		
学位授与年月日	平成 18 年 2 月 28 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当		
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	再定住期における日系アメリカ人の社会復帰：1942 年－ 1952 年		
主 査	筑波大学教授	博士（文学）	木 村 和 男
副 査	筑波大学教授	博士（文学）	小野澤 正 喜
副 査	筑波大学教授	博士（文学）	姫 岡 とし子
副 査	筑波大学助教授	Ph.D（歴史学）	佐 藤 千登勢

## 論文の内容の要旨

本論文は第二次大戦の勃発により、アメリカ西海岸から強制立ち退きを迫られて収容所に送られた日系アメリカ人が、戦中から戦後にかけてアメリカ各地に再定住した過程を、後述する独自の視角から実証的に検討し、その歴史的な意味を問い直そうとした研究であり、序章、本論四章、終章、文献目録から構成されている。

序章において、まず本論文の課題と視角が明示される。日系アメリカ人の強制立ち退きや、その不当性を訴えた戦後の政府補償（いわゆるリドレス）問題については、これまでも国内外で膨大な研究が蓄積されてきた。しかし、彼らが収容所からどのような形で解放され、いかにして再定住したのかは、ほとんど問題にされてこなかった。実際には、日系人の再定住は戦争終結前の1942年から始まり、1952年の新移民法成立まで続いた。それゆえ従来のように、日系アメリカ人の歴史を1945年8月15日で截然と分断するのではなく、戦中と戦後とを一貫させた視野が必要となる。またアメリカ政府の戦時定住局（WRA）の施策や、日系人の再定住状況を説明するだけでなく、日系人が否応なく直面させられた忠誠心やアイデンティティーの混乱や変容といった内面をも重視しなくてはならない。本論文は、戦中・戦後をまたぐ通時性と、日系人の意識にまで立ち入った内面性とを正面から課題に据えるという視角から、日系アメリカ人の歴史により精緻な分析と新たな知見を加えようとしている。

第一章「第二次世界大戦中の再定住」では、大戦中の再定住が検討される。戦時定住局による最初の再定住策は、収容された日系人の中からアメリカ社会に同化しやすい人々を厳選して、軍事指定地域外の中西部や東部に送り出し、日系人を広く拡散させ同化することだった。戦時中は日本への帰属意識が薄い二世の成人期であり、彼らが一世に代わって日系の中心層をなす移行期にあたり、最初に解放されたのも英語に堪能な彼ら二世である。収容所内部で日本人意識にこだわる一世と、再定住に積極的な二世との間に深刻な対立が生じ、一枚岩的な日系社会に大きな亀裂を生み出してゆく。二世を中核とする日系市民協会（JACL）が戦時定住局と協力して、戦後への基本路線が描定されたのである。

第二章「西海岸への帰還」は、西海岸への帰還が許可された1945年1月から最後の収容所が閉鎖された1946年3月までを検討する。収容所に残留した日系人は、無条件で収容所閉鎖を歓迎したのではなく、戦

戦時定住局の再定住策に対する不信と、差別的な社会に遺棄されることへの不安と動揺が広がっていた。戦時定住局が経済的負担となった収容所の閉鎖を急いだのに対し、残留日系人の多くは、帰還後の社会的、経済的公正さへの保証を求めたのである。結果として日系人は、アメリカ軍の徴兵に応じた者から、1943年に行われた「忠誠審査」で不忠誠の烙印を押されトゥールレイクの隔離収容所に送られた者まで、さらに重層的に分裂した。戦時定住局による日系人の拡散、同化策は、その限界を露呈したのである。

第三章「日系コミュニティの再生及び文化的創造」では、再定住期に日系人コミュニティと諸組織が新たな形で再建された過程を、アメリカ化、民主主義、愛国心といった新たな社会規範に対する反発か受容かの葛藤を軸に、彼らの意識面に立ち入って検討する。日系市民協会に結集する二世たちは、収容所内で地域を越えた一体感を強めており、一世とは異なって白人文化を受容しながらも、他の人種的マイノリティーとも協調できる日系のコミュニティと文化を創造しようとした。重要な事例として、当時のオピニオン・リーダーだったメアリー・オーヤマの活動が分析される。

第四章「再定住後の日系アメリカ人をめぐる人種関係」では、なお人種差別的な構造を持つ戦後アメリカ社会の中で、日系人がどのような人種意識を持ち、日系コミュニティの再生に取り組んだかが検討される。再定住期に日系最大の組織となった日系市民協会は、戦時定住局の路線に沿ったアメリカ化（同化）策を打ち出す一方、黒人、ユダヤ人、フィリピン人などとも連帯して、人種差別に抵抗しようとした。他のマイノリティーと距離を置こうとする日系人も少なくなかったが、市民協会の活動は、日系人が何者であるかを問い直したうえで、「日系アメリカ人」としてアメリカ社会の構成要素となる一方、文化活動やコミュニティ再生を通じてその独自性を維持しようとする方針を定置させていった。

終章「再定住期の歴史的意義」では、以上の分析をまとめ、再定住期における日系アメリカ人は、世代間の乖離や分裂、人種問題への自覚の不徹底さや限界をも色濃く残していたとはいえ、二世を中心とする日系市民協会の活動が1960年代に始まる賠償請求運動や多人種・多文化社会の成立を展望する新たな日系アイデンティティーの構築の前提となったと結論づけている。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文はこれまで研究史上の「空白期」であった再定住期を、日系アメリカ人コミュニティの再創造期として捉え直そうとした意欲的な試みであり、同時代の新聞、インタビュー、個人文書など膨大な一次史料を丹念に読み込んだ実証研究である。アメリカ政府の戦時定住局による同化政策や、それに翻弄された日系人の動きを追うだけでなく、日米双方に引き裂かれた彼らの「忠誠心」や、民主主義、多人種との協調といった社会規範に対する意識変容といった内面まで踏みこんでいることが、本論文の説得力をさらに強めている。

再定住期を、戦争終結の前後を貫通する1942年から1952年までの間と定義したことで、動揺と分裂を繰り返しつつも新たな「日系アメリカ人」意識を鍛え上げられたプロセスが、よりダイナミックに描かれることになった。これまで、日系人が日系たることを忘れようと努めた「社会的記憶喪失」期、あるいは沈黙＝同化期として、ネガティブに評価されがちだった再定住期を、戦中から戦後にかけての日系人の集団的、個人的な動向と主張を示す広範な史料を精読することで、新たな日系人意識やコミュニティの再生期と捉え直した功績は大きい。

分析の要となっているのが、強制収容所という極限状態における、日系人の動揺と対応を分析した第二章であり、これが続く第三、第四章への不可欠で説得的な布石となっている。日系人を一括りに捉えるのではなく、戦時定住局の方針に強く反発した一世と、協調姿勢をとった二世との世代間の対立、それぞれの世代内における「親日派」と「親米派」との対抗、それに各個人の内部でさえ分裂していた日本とアメリカへの帰属心の葛藤が、可能な限りでの史料を駆使して詳細に生々しく描かれているのは、感動的でさえある。再

定住期が一世から二世への世代交代期と重なった偶然が、日系市民協会に結集した二世の「アメリカ化」を強力に後押ししたことが理解できる。

第三章以下で検討される日系コミュニティの再生過程において、日系人は当然ながら、白人への同化と、他の人種的マイノリティとの連帯との間の、深刻な矛盾に逢着する。日系市民協会の努力はひとまず白人社会との同化に傾きがちだった。黒人新聞のコラムニストだったヒサエ・ヤマモトなどが、先駆的なマイノリティ連帯論を主張したにもかかわらず、それがただちに実を結んだわけではない。いまだ白人からの人種差別に直面しながらも、黒人、ユダヤ人、他のアジア人との連携には消極的だった日系人の実態も活写されており、こうした限界を内包しながらも、再定住期の日系アメリカ人による社会復帰は1960年代から始まる公民権運動や賠償請求運動に引き継がれていったと結論される。

それゆえ本論文は、従来ネガティブにのみ解されがちだった再定住期を、通時性と内面性を重視する新たな視角から、日系コミュニティの再生期としてポジティブに再解釈しており、研究史上でも重要な意味を持つであろうし、その試みはほぼ成功している。

オリジナルな再解釈や、説得的で緊密な論文構成は、内外研究史の明確な整理と問題設定、さらに必要とされる一次史料の博搜と地道な読み込みを抜きにしてはありえない。巻末の文献目録は、著者が長期の海外調査を含め、10数年の長きにわたって史料と苦闘した事実を如実に示しており、その努力が重厚な学術研究としての本論文に結実したといえよう。

しかしながら、意欲作であるゆえに、いくつかの問題点がないわけではない。再定住期の分析は、主に日系人の故地であった西海岸に集中されており、強制収容所の「エリート」たちが最初に再定住した中西部や東部にはほとんど言及されていない。彼らの大半が戦後に西海岸へ帰還したのは事実だが、それにもかかわらず日系人の「拡散」は一貫して続いており、中西部と東部とでの日系コミュニティの再生過程は、西海岸との比較対象として重要な課題となるからである。

日系人の内面的「意識」を重視した分析は、収容所という閉鎖社会における日系人間の様々な葛藤や対立をヴィヴィッドに浮き上がらせることに成功している。ここで利用されているのは収容所内で戦時定住局の検閲を受けて発行された諸新聞、アメリカ人研究者グループによる聞き取りインタビューなどであり、著者はこれらの史料のバイアスを慎重に推し量ったうえで、適切に利用している。しかし、戦後の日系社会における様々な亀裂や試行錯誤を論じるうえで、メアリー・オーヤマやヒサエ・ヤマモトの主張がやや過度に強調されているとの印象は否めない。彼女たちが当時の先駆的オピニオン・リーダーだったことは確かだったとしても、日系人多数派の意識を代弁していたとはいえぬからである。

また他の人種的マイノリティとの連帯を論じるにあたっても、日系人の多様性が重視されているのに対して、黒人、ユダヤ人、フィリピン人などの態度は若干の紛争、訴訟事例を通じてやや一面的に描かれており、さらなる検討を期待したい。さらに1960年代からの公民権運動、賠償請求運動との連続性についても、時期的には本論文の対象外とはいえ、再定住運動とのリンクをより慎重に裏付ける必要があると考えられる。

とはいえ総じて本論文は、日系アメリカ人の歴史において忘れられようとしていたテーマを、広範な史料調査を通じて再解釈し、その重要性を明示するという、歴史学における一つの典型的な作業を立派に果たしている。収容所内の日系人が決して一枚岩だったのではなく、世代や価値観の相違に基づくきわめて人間的な葛藤が繰り広げられ、それが結果として戦後への新たな対応を生み出してゆくプロセスが十分説得的に解明されている。いくつかの問題点は、本論文が精緻な力作であるゆえに生じる望蜀の念であり、論文全体の価値を損ねるものではない。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。